



## 隣人

皇學館大学 4年

名倉 芳美

「あ、帰ってきた。」

隣人の足音だ。

三年前、初めての一人暮らし生活が幕を開けた。綺麗な部屋、綺麗な台所、綺麗な浴室、嫌なところが一つもなく、私は新生生活に心を躍らせていた。しかし、生活をするうちに気になることができたのだ。それは、壁の薄さだ。私の住むアパートは壁が薄い。階段を上る音、鍵を開ける音、カーテンの開閉の音。様々な生活音が聞こえる。お互いのプライバシーが心配になるほどだ。隣人の生活音が聞こえるということは、同じように私の生活音も聞こえているのではないか。神経質な私は、できる限り音が出ないように生活をした。しばらくその生活を続けたが、精神的に疲れてしまった。

数ヶ月経つと、隣人とは仲良くなり、話すことも増えた。そのうちに、薄い壁のことが話題に上がった。彼は、私の生活音をさほど気にしていないようだった。少し安心した。コミュニケーションをとるようになり、

「今日は友達が来るから、うるさくなるかもしれない。」  
そんな声をかけ合うようになった。咳が聞こえれば心配をする

ようになつた。声をかけ合うようになり、お互いの気遣いがみえる関係に居心地の良さすら感じていた。もう、生活音が聞こえることも当たり前になつた。さほど気にならない。

隣の部屋に誰かがいること、生活音が聞こえることで、安心している自分がいる。一人暮らしではあるが、独りではない気がするのだ。隣人や大家さんとの心の距離も近い気がする。温かみを感じる。隣の部屋に誰が住んでいるか知らない、知つても話すほどではない。最近では、そのような人も多くいると思う。もし、このアパートの壁が厚かつたら。今のように、同じアパートだから理解できる話、共有したい話を話させていただろうか。今では、この壁に感謝している。

(審査評) 初めての一人暮らしで心細い思いをしている時に聞える隣家の音で隣人の生活を想像できてしまうし、自分の音も想像されているに違いないし、隣人がどんな人なのか考へると毎日ドキドキハラハラ。そんな罪作りな薄い壁の向こうにいたのは優しくて気さくな男子。心が通えば同じ音がウキウキ、ワクワク、ホッとする音に聞える。それも薄い壁のおかげ。そんな心の移ろいや日常風景が1行目から拡がる、心温まる作品です。引込まれました。

吉田幸司